学徒動員「殉難之碑」慰霊祭

令和５年８月7日午前11時半より、学徒動員「殉難之碑」慰霊祭が、関係者22名（学校・同窓会・生徒代表）の出席で行われた。

昭和20年８月、大牟田の軍需工場で働いていた八女工業学校の生徒８名が大空襲などの戦禍により若くして、志半ばに尊い命を奪われている。この碑は、50回忌にあたる平成６年８月７日に１年をかけた募金活動によって建立され、毎年慰霊祭が開催されている。今年は、30回目の慰霊祭となった。この戦争では、当時教鞭を執られていた先生方にも犠牲者が出ている。

黙祷をして殉難者のご冥福を祈った後、慰霊祭主催者代表の同窓会長溝田豊実氏（昭和48土木科卒）が追悼メッセージを読み上げた。

<追悼メッセージ>

太平洋戦争（第二次世界大戦）が終わり、今年で78年になります。戦争体験者の方々も高齢化が進み、これまでこの「殉難之碑慰霊祭」の世話人代表を務めてこられた昭和21年土木科卒業の村上和義様も94歳という高齢になられ、この慰霊祭への参加が難しくなられています。村上様の思いを胸に同窓会を代表して謹んで哀悼の誠を捧げます。

昭和16年12月の開戦から昭和20年８月の終戦まで、我が国は戦争一色で、昭和19年８月の学徒動員令により、当時八女工業生であった村上さん達は、大牟田の軍需工場に動員配属されたそうです。終戦間際の昭和20年８月７日の大牟田大空襲により、八女工業生８名が殉難に遭遇されています。８月15日の終戦が10日早ければとの思いがこみ上げてきます。特に、多くの被害をもたらした広島（６日）と長崎（９日）の原爆投下は、被害の大きさが終戦の決断要因になったと言われています。

戦争がもたらしたものは、飢餓と国土の荒廃であり、得るものは何も無かったことは、終戦直後の日本国民が経験しています。現在は国民の努力で国土が復旧し、平和が訪れ「平和の尊さ」を実感していますが、ここに眠られる学友は戦争の犠牲者であり、改めて無念の思いが募ります。

平成６年に建立されたこの「殉難之碑」の前で行われる慰霊祭は、毎年開催され今年で30回目を迎えましたが、当時を知る方の参加がなくなった今も、同窓会・学校・生徒会で継続し、殉難者8名の方々の冥福を祈るとともに、殉難者の無念と平和を、未来に語り継ぐ式典となっています。学校では在校生の平和学習でもとりあげていただき、平和の尊さを考える機会を作ってもらい、有難く思っています。

現在、世界では悲惨な戦争が続いている国々があり、又、戦争を視野に入れた外交が行われている地域もあります。このような世界状況の中、尊い青春や将来の夢を奪われた殉難者8名の御霊が安らかなることをご祈念申し上げ、恒久の平和を願いシンボルである「殉難の碑」を前に平和の尊さを次世代に語り継いでいくことをここにお誓いいたします。

この後、生徒会を代表し、生徒会長の前田琉亜君が挨拶をした。

最後に、出席者全員が慰霊碑に献花をして慰霊祭を終了した。